



アイヌを書かずにアイヌを書く：
有島武郎『星座』論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-11-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 花奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000311

アイヌを書かずにアイヌを書く

——有島武郎『星座』論

石井花奈

一九世紀末の札幌を主な舞台とする有島武郎の最後の長編小説『星座』¹は、白官舎と呼ばれる建物に寄宿する札幌農学校の学生たちをめぐる群像劇である。章ごとに視点人物が入れ替わる点に特徴があり、それら複数の人物に対して内的独白を駆使することによって、本格的な「意識の流れの小説」をいち早く日本文芸にもたらしたと評価したのは中村三春「有島武郎『星座』における内的独白の技巧と群像の造形」（『日本文化研究所研究報告』一九八四年三月）であった。² 主な登場人物として星野清逸（語り手は「清逸」と名指す）、園、渡瀬、西山、柿江、人見ら学生たちに加え、彼らと関わる女性たちとして三隅ぬい（同じく「おぬい」）、おたけ、白官舎の世話人婆や、新井田の奥さん、清逸の妹おせいがいる。おたけと新井田の奥さん以外の人物は、少なくとも一度は視点人物としての役割を与えられている。

このような視点の多元性がつくりだす物語の複雑な構造については既に相当数の言及があるが、先の中村論では次のように説明されている。³「学

生たちの自己確立という大きなモチーフの下に、一方では思想的及び実践的営為による飛翔、他方では愛情あるいは性欲の問題という二つの小モチーフ」があり、「自己主張をめぐって相互に相手をライヴァル視する西山・星野は前者、連れ立って遊廓を訪れた柿江・渡瀬は後者のモチーフを、それぞれ対として比較的重く担っている」。「おせいが星野及び学生たちを対象化する経済的現実の批判という役割を担うのに対して、おぬいは渡瀬を始めとする彼らの倫理的側面を検証する機能を負う人物」である。そのうえで「作品の統一主題」は「星野から渡瀬を経由して園に至り着く、おぬいの家庭教師受け渡しのプロット」であるとした。

『星座』の物語構造を系統図法的に示したのが中村であるならば、「螺旋状」という表現で把握したのが江種満子「『星座』再論」（『文教大学国文』一九八三年三月）である。「小説の全体は幾人もの人物を縦軸とし、話者は一章ごとに軸の周囲を螺旋状に巻きつき、場としての北海道（地方）と東京（首都）を対照的に結び、性としての男と女、キャラクターの正と負、存在としての表層と深層、などの対立項を青春の総体として内包する巨大な螺旋状の世界」が『星座』の構造であるとされた。本稿の物語構造に対する理解は、どちらかといえば江種の説明に近い。ただし、螺旋を構成する線は人物のみによって成るのではなく、特定の人物が担わされた問題系（中村のいうところの「モチーフ」）と絡み合った線としてあり、全体としてみたときにはそれらが三重、四重の螺旋構造を成してみえるというイメージである。その内部で各々の線が時に干渉し合うさまを、語り手が任意にフォーカスすることで物語が編まれている。

その中で最も太い線を担うのはやはり清逸、園、渡瀬、そして彼らに深い葛藤を与えるおぬいであろう。立身出世の問題が絡まる清逸の線には、

実行を第一として誰よりも早く上京する西山と、西山の思想の空虚さを批判した柿江の線が関わる。性欲の問題が絡まる渡瀬の線には、薄野遊廓への欲望を抑えきれない柿江と、渡瀬の誘惑によって自己の内に潜む性を自覚するおぬいの線が特に緊張感を伴って関わる。こうした様相に対して、いつもどこか並行的にあるのは科学と文学の二元論が絡まる園の線であるが、最終的にはおぬいと結婚をめぐつて大きな振幅をみせることとなる。

江種が物語構造を説明する際に指摘した対立項には首肯しつつも、本作における北海道と東京は単純な二項対立としては扱われていないように思われる。確かに清逸も上京を希望しているし、西山は実際に上京してきているのだが、東京を舞台とした西山視点の章が設定されることはなく、その近況を伝える西山の清逸宛書簡は素気なく提示されるのみである。おそらくそれは、書簡の冒頭で西山が次のように書きつけたがゆえである。「俺はやつぱり東京は面白い所だと思ふよ。室蘭か、函館まで来る間に、俺は綺麗さつぱり北海道と今までの生活とに別れたいと思つて、北海道の土のこびりついている下駄を、海の中に葬つてくれた」（第一章）——信州から学問のために札幌へと移ってきた西山は、念願の上京に際して「綺麗さつぱり北海道」と「別れ」てしまったのである。さらに、最終章は園が乗車した東京行きの汽車が札幌を発つたところで閉じられている。語り手は北海道という地から決して離れないのである。

では、語り手は北海道の何を語ろうとしているのだろうか。視点人物らがいるのは札幌、千歳、小樽である。札幌が主な舞台であるのはいいとして、千歳には清逸の実家があり、小樽には清逸の妹おせいの女中奉公先がある。だから清逸の線には立身出世の外側にもう一層、北海道の問題が分厚く絡みついている。

坂といふものゝ一つもない市街、それが札幌だ。手稻藻岩の山波を西に負つて、豊平川を東にめぐらして、大きな原野の片隅に、その市街は植民地の首府といふよりも、寧ろ気づかれのした若い寡婦のやうにしたらなく丸寝してゐる。／白官舎はその市街の中央近いとある街路の曲り角にあつた。開拓使時分に下級官吏の住居として建てられた四戸の棟割長屋「略」は高々と聳えてゐる。

引用したのは、唯一視点人物が設定されない第四章の冒頭である。語り手は北海道が帝国日本の「植民地」であり、札幌がその「首府」であると認識している。その文脈の中で、白官舎が「開拓使時分に下級官吏の住居として建てられた」ものであることも明かされる。渡瀬以外の学生たちは皆この白官舎に住んでいるのである。本稿はここで明示されている北海道の問題、帝国日本における北海道の「植民地」化とアイヌをめぐる問題という視座から『星座』の読解を試みるものである。

その具体的な内容に入る前に、「植民地の首府」に与えられた何重にも含みのある女性の比喩について付言しておきたい。内藤千珠子「フィクションの暴力とジェンダー『ジャッカ・ドフニ』が描く「アイヌ」の物語」（石原真衣編『記号化される先住民／女性／子ども』二〇二二年八月、青土社）は、「オリエンタリズムを背景にもつ帝国の語りは、帝国の主体が男性ジェンダー化される一方で、植民地の側の人種は他者化され、エキゾチックな性的魅力をもった女性のイメージを媒介に欲望の対象とされるといった定型をもつ」と述べている。ここでの比喩も、ともすればその定型に収斂するように見えるのだが、実は一筋縄ではいかない。この定型になぞらえて

みれば、「植民地」としての北海道は、帝国日本の欲望の対象であるという意味で女性ジェンダー的である。だがその「首府」である札幌もまた、テクストでは女性ジェンダー化されている。開拓という名の入植を推し進めていく拠点としての札幌は男性ジェンダー的であるはずなのである。つまり札幌という市街は、男性ジェンダー的な権力を内包しながらも、それ自体欲望される対象でもあるという両義的な地である。

そのような札幌に与えられた比喻「気づかれのした若い寡婦のやうにしだらく丸寝してゐる」を読み解いてみるならばこうである。まず「若い」という形容詞には、札幌が「首府」としての役割を担うこととなったその歴史性が暗示されている。いささか唐突にも感じられる「寡婦」は、おそらく「首府」の音から連想された「主婦」が「寡婦」へと変換されるという道筋を辿っている。重要なのは「寡婦」という語が示唆する不在の主人であろう。それは入植の舵取りを開拓使に委嘱する帝国日本であると考えられる。「若い寡婦」とは、いわば二重化された男性ジェンダー的な権力への従属と奉仕が期待される存在なのである。しかも、そのような「若い寡婦」は「気づかれ」しており、「しだらく丸寝してゐる」。「丸寝」は衣服を着たまま寝ることを意味する語であるから、この「若い寡婦」は身支度を整えることもできずに浅い眠りの中にいるということになる。「気づかれ」や「しだらく」という語は、その疲労が一過性のものではないことを示している。実際この「若い寡婦」が「はじめて深い眠りに落ち」るのは、第四章の末尾にあるように白官舎の窓から全ての灯が消えたときなのである。二重化された権力への従属と奉仕を絶えず強いられ続けるという支配のあり方が、この比喻には含意されているのである。

1 有島武郎におけるアイヌ

「アイヌと、熊と、樺戸監獄の脱獄囚との隠れ家だとされてゐるこの千歳の山の中から、一個の榴弾を中央の学界に送るのだ」——清逸はこのよな野望を抱く人物として造形されている。「一個の榴弾」が何年にどこから「中央の学界に送」られようとしたのか、そこに一八九九年の千歳が設定されたことの意味は重い。

この点を最初に指摘したのは、『星座』を歴史学の専門的見地から考察した井上勝生「札幌農学校植民学と有島武郎——「星座」と千歳川アイヌのコスモス」⁴である。井上は、清逸のモデルとされる星野純逸の情報とテクストとを対照することによってその設定が意図的なものであることを指摘し、「当時の千歳村は、貧しい和人はいましたが、アイヌ民族中心の村」であること、一八九九年が「北海道旧土人保護法」制定の年であることの重大性を述べた。たとえば竹ヶ原幸朗「教育のなかのアイヌ民族 近代日本アイヌ教育史」（二〇一〇年三月、社会評論社）は、同法を「明治初年以來のアイヌ同化政策の集大成」と位置づけている。つまり作中における一八九九年一〇月末から一一月末にかけての千歳は、「北海道旧土人保護法」制定からおよそ半年あまりが経過した時点の千歳であり、アイヌの文化、生活、尊厳、ひいては生命までもが奪われつつある、まさしくその只中の千歳であったのである。

井上勝生はこうも述べている。「有島の作品群を讀んでいて不思議だったのですが、『カインの末裔』などでは、大規模寄生不在地主に圧迫される小作人の悲劇を描きますね。」ところが、有島は北海道にいながら、大テーマであるべきアイヌ民族問題を全然、描かない。「有島が触れなかつたというのは、札幌農学校のなかに、表面化をはばかるような、札幌農学

校の、アイヌ政策との深い関わりがあったからなのです。それは札幌農学校第四代校長であった橋口文蔵の非職に関わる、「アイヌ民族共有財産」に手を付けた一連のスキャンダルを指している。その詳細は井上論に譲るとして、ここでは井上の疑問を別の角度から考えてみたい。

取り上げるのは中條（宮本）百合子の「有島武郎の死によせて」（一九二三年七月一日執筆）、有島の訃報に接してから三日後に記された遺稿である。冒頭では有島の情死という事実「実に心を打たれ、その夜は殆ど眠れなかった」こと、告別式に列し「じつと白花につつまれた故人の写真を見たら、思わず涙にむせび、声を押さえることが出来なかった」ことなどが綴られたのち、「彼の温容が心を打ったこと、並、人生の切なさ、恐ろしさ、平凡の底に湛えた切迫さ、真剣さを、一時に感じ、涙となったと云ってよい」と、冷静さを取り戻した自己分析も記されている。

「或女」以後、私は、彼の作品が、或行き詰りを持ち始めたことを知った。読んで見ると、精神の充実したフルーエントなところがなく修辞的でありすぎ、いつまでも青年の感傷に沈湎して居るような歯痒さがあった。「星座」にも同じ失敗を認める。大づかみに、ぐんと人生を擱まず視点が揺れ、作家としての心が弱すぎた。為に、あれ丈文化的価値を裏に持った素材が、明かにこなされ切れなかった。／時に、彼の精神の或面に、私が、物足りなさによる侮蔑に近いものを感じたのは争われない。何か、この先もう一つ、吹つきれば素晴らしいのが見えて居るのに、いさぎよくそこまで踏切ってなぜ呉れないか、と云う愛の変形であったのだ。

『星座』に対する歯痒さ、物足りなさ、苛立ちが率直に吐露されている。この文章のおよそ五年前、中條百合子は「風に乗つて来るコロポックル」（生前未発表）を執筆しており、「旧土人保護法」の差別的な本質をある程度把握していた」との評価がある。そのような作家が『星座』に対して「あれ丈文化的価値を裏に持った素材が、明かにこなされ切れなかった」というとき、彼女にはテクストに散りばめられたアイヌに関連する要素が見えていたのではないかと考えてしまうのは早計であろうか。中條百合子が記したのは、その問題が見えていながら真正面から文学の問題として取り扱わない（ように見える）、有島の煮え切らなさへの苛立ちだったように思われるのである。だが、そのような評価も無理はない。本作においてアイヌは、「シムキ」という固有名をもつ者が清逸の回想の中で一度だけ言及されるのみである。

近年、アイヌに関する研究においてセトラ・コロニアリズムという概念の活用が進められており、その動向は日本近現代文学研究の領域においても注目され、徐々に取り入れられつつある。マーク・ウインチェスター「いま、戸塚美波子「一九七三年ある日ある時に」を読む」（『思想』二〇二二年一二月）によれば、セトラ・コロニーは「入植植民地、移住型植民地」と訳され、「本国が独立国を建国するか土地を本国に「内国化」し、移民を送り込んで定住させ、それによって先住民族となる人々の土地と資源との関係を無視・破壊し、同意と対話を欠いたままに新たな社会を建設するもの」（傍点原文）である。また、平野克弥「主権と無主地——北海道セトラ・コロニアリズム——」（『思想』前掲）は、「内国」という視点は「アイヌモシリが日本の主権領土に強制的に包摂された後の、アイヌ民族の困窮化や従属状況を説明するのに有効かもしれないが、内国化

の論理と過程、つまりアイヌモシリを奪い、そこに和人を定住させていくセトラー・コロニアリズム（定住型植民地主義）の論理と過程を分節化することはできない」としたうえで、その「グロテスク」な暴力性を次のように剔抉してみせた。「セトラー・コロニアリズムのもとで行われる支配とは、他者を単に排斥したり抑圧することではない。それは、規範（主権、進歩、文明、内）によって例外化された存在を植民者との絶対的な従属関係に包含することで排除し、排除することで包含するのである。換言すれば、セトラー・コロニアルな支配とは、規範との関係において例外化された存在を臣民として認めることで否定し、否定することで認めるという宙吊りの状態を意味しているのである」（傍点原文）。

こうした蓄積を踏まえて『星座』というテキストに立ち返ってみたとき、アイヌを直接的に登場させないという方法は、先住する人々の存在を抹消するセトラー・コロニアリズムの暴力性に通じてしまう危険性を孕んでいると言わねばならない。しかしこれまでみてきたように、テキストにはアイヌをめぐる問題を指し示す表徴が確かに散りばめられている。それらを、星と星とを結んで星座を浮かび上がらせるように読むことがテキストの要請である。その表徴の中でも特に重要なのは、本作で描かれる学生たち「北海道開拓のエリートを育成する札幌農学校」¹⁰⁾の学生たちであることである。つまり、彼らは北海道における「植民地」化の論理を、学問を通じて内面化しつつある者たちである。ならば『星座』に描かれているのは、平野の言葉を借りれば、セトラー・コロニアリズムの「論理と過程」の一側面であるはずである。それを明らかにすることが本稿の最終的な目的となるが、それに先立って、アイヌを直接的に描かないという方法を有島研究の枠組みからも考えてみたい。

重要な観点となるのは「宣言一つ」（『改造』一九二二年一月）である。¹¹⁾ アイヌを作中人物としての強度を具えたものとして登場させないという選択は、「宣言一つ」を書かずにいらなかった作家有島武郎の倫理観に基づくものである。無論「宣言一つ」で述べられたのは、「支配階級者の所産」であるところの自分は「第四階級」とは「無縁の衆生」だという「宣言」なのであり、アイヌは「第四階級」とは異なる存在である。しかし、同化政策の只中で北海道が帝国日本の「植民地」であることを正しく認識していた有島において、アイヌが搾取される者たちであり、自らが北海道の地主の後継者、ほかならぬその搾取者であることもまた痛烈に認識されていなくてはならない。

井上も取り上げているとおり、有島は札幌農学校在学時の一九〇〇年三月に修学旅行で千歳の孵化場を訪れている。「北海道旧土人保護法」制定の翌年のことである。そのときの様子が同年三月一日付の両親宛書簡に記されている。孵化場への「道中甚だ幽邃にして殆ど太古の如く」、「折々人家ありと見れば是皆アイヌの住む者に有之」、アイヌ犬に吠えられながらも目にしたその光景は次のようなものであった。

正直にして朴敬、勇猛にして多情なるアイヌの遺民が長髯を振ふて山中の「自然」と勇ましき戦闘を為し、酷薄なるシヤモ（彼等が日本人を指して云ふ語）の蛇の如き毒手を避け居る有様は転た愁痛にして清新なる一篇の詩に御座候。小子は例の自然癖に不堪独り後れて呻吟しつつ心中無限の慰藉を得て孵化場に着仕候。

「酷薄なるシヤモ」の「蛇の如き毒手」という表現からは、これまで行

なわれてきた同化政策、いまなお行なわれているその内実を有島が承知していたことが窺える。¹³そこから逃れ必死に生活する「アイヌの遺民」を目の当たりにしていた有島が、そして北海道の地主の後継者となった有島がアイヌを安易に描くことはできないだろうし、描くべきではないという意識が働いたと考える方がむしろ自然である。しかし書かなければ、同時に蔓延っていた「滅亡」の論理、「進化論に基づいて「自然淘汰」される運命にある人々」という論理（平野前掲論文）にまで加担してしまうこととなる。有島が確かに目撃したように、アイヌは帝国日本が「北海道」と呼ぶ地で、本来の文化や生活を奪われながらもその営みを続けているのである。固有名を示すというその方法に、有島の倫理観は刻み込まれている。本稿を「アイヌを書かずアイヌを書く」と題した所以である。

2 アイヌ表象の系譜

一九二〇年代までを射程としたとき日本近代文学においてアイヌを扱った主な作品としては、幸田露伴「雪紛々」¹⁴（一八八九年一月・二月）、岩野泡鳴のいわゆる「泡鳴五部作」¹⁵、中條百合子「風に乗つて来るコロポックル」¹⁶（一九一八年執筆、生前未発表）、秋田雨雀「国境の夜」¹⁷（一九二〇年一〇月）、長見義三「母胎より塚穴へ」¹⁸（一九二九年一月・二月）などが挙げられる。¹⁷しかし「雪紛々」は、「アイヌ」滅亡の物語を消費する境位¹⁸を讀者に与え、「アイヌ」の現在¹⁹を「凍結」させる構造を具えた「代表的な作品」の一つとされており、「泡鳴五部作」もおよそ同様の評価がなされている。¹⁹「風に乗つて来るコロポックル」は、既に述べたように有島と問題意識を共有していた可能性があり、執筆時期としては『星座』に先行するが生前未発表である。以上を踏まえれば、この中で検

討を要するのは秋田雨雀のそののみである。『新小説』に掲載された戯曲「国境の夜」は、のち現代劇叢書『戯曲集 国境の夜』（一九二二年五月、叢文閣。本文引用はこれに拠る）に収録された。

物語の舞台は「北海道、十勝平原」、「遠く雪に包まれた国境の連山が見える」。開墾者大野三四郎の「頑丈さう」な家屋の内部は「第一期の北海道成功者の生活を想ひ出させる」ものとして設定されている。そこに子供を抱えた男女の旅行者が凍死寸前の状態で訪ねて来るのだが、大野は頑として受け入れない。「他人の生活を妨げない代りには、他人のために自分の生活を妨げられるのもいやだ！」という彼の「哲学」の根幹には、経済的理由で学問を諦めざるを得なかった過去がある。

旅行者が去ったあとと酒をもらいにやって来たアイヌのアンリシカから、大野は子供を背負った「シヤモが二人死んでゐた」ことを知らされる。アンリシカは大野が開墾に着手した頃に熊に襲われかけたところを助けた人物で、それ以来の交流がある。旅行者が来る前の場面では、「アイヌは一寸見ると怖さうだけれども。みんな温和しいものね」という娘に「然うだ。アイヌ人は内地人よりもずっと温和しい」と応える大野が描かれてもいる。アンリシカが去ったあと、大野は「盗賊」と自称する覆面者（「主人の影」の夢を見る。覆面者は「お前は自分の生活を掻き乱されたために、何十人、何百人の生活を掻き乱してゐるか知れない」と大野を問い詰め、ピストルを突き付けながら血液が付着した縄で子供たちの首を絞めるよう迫る。再びアンリシカが訪ねて来たことよって大野は夢から覚め、物語は次のように締め括られる。

アンリシカ。ニシパ、何処さ行くんだべいや？

主人。己れと一緒に昨夜死人のあつたところへ行くんだ。あの人達は新しい雪の下になつて死んでゐるだらう……よく温まつて呉れ。

アンリシカ。ニシパ、今日何うかしたか？『シヤモの心は二つある』つてほんとだてや。アイヌの心はいつでも一つだ。駄目だてや。駄目だてや！

主人。（アイヌの毛深い手を堅く握る）アンリシカ、お前は幸福な人間だ！ お前こそほんとの人間なのだ！

（主人はアイヌをだきかゝへるやうにしていつまでも離さない。）

搾取される側から搾取る側に立った大野の「五十年間の実行から生れて来た」「哲学」が問われていることは明瞭である。一九二〇年という時点においてステレオタイプを逸するアイヌを直接登場させつつ、開墾者の搾取性を問う物語が提出されていることは一定の評価に値する。しかし大野が「だきかゝへるやうにしていつまでも離さない」のがアンリシカではなく「アイヌ」であること、ここに見られる些か安直な予定調和をアイヌ表象の一つの達成として見ることは慎まなければならない。では、有島武郎はアイヌをめぐる問題をどのように描いただろうか。

3 「かすかに聞」るやうでもある——意識に去来するもの

同化政策の渦中にある千歳という地、道内で最初に孵化場が設置された千歳川、そこでアイヌと共に働く和人を肉親にもつ清逸。その清逸が自己存在の「証明」としての論文を学界に送ろうとするとき、その目論見を根幹で支えているのは「アイヌと、熊と、樺戸監獄の脱獄囚との隠れ家だと

されてゐるこの千歳の山の中」というバックグラウンドである。つまり「野蠻」とされるものが単食う地としての千歳から「中央」に送られるからこそ、論文は「一個の榴弾」になり得るのである。だが注意しなければならないのは、「熊」と「樺戸監獄の脱獄囚」とに並列されるはずのないアイヌがそこに並列されているということである。このような発想の仕方と密接に関わっているはずの、作中で唯一アイヌが言及される第六章の場面は次のようなものである。

裏庭のすぐ先きを流れてゐる千歳川の上流をすかして見ると、五町程の所に火影が木叢の間を見え隠れしてゐた。瀬切りをして水車がかけあつて、川を登つてくる鮭がそれにすくい上げられるのだ。孵化場の所員に指揮されてアイヌ達が今夜も夜通し作業をやつてゐるのに違ひない。シムキというアイヌだった。その老人が樺炬火をかざして、その握り方で光力を加減しながら、川の上に半身を乗り出すやうな身構へで、鰭や尾を水から上に出しながら、真黒に競り合つて鮭の昇つてくる具合を見つめてゐた……それは清逸が孵化場の給仕をしてゐた頃に受けた印象の一つだったが、火影を見るにつけてそれがすぐに思ひ出された。気を落付けて聞くと涼々と鳴りひびく川音の外に水車のことん／＼と廻る音がかすかに聞こえるやうでもある。窓のすぐ前には、何年頃にか純次やおせいと一本づゝ山から採つて来て植ゑた落葉松が驚くほど育ち上つて立つてゐた。「略」二本は無事に育つてゐたが、一本は雪にでも折れたのか梢の所が天狗巢のやうに丸まつてゐた。

ここに示されているのは、アイヌと共に給仕として働いていた清逸の過

去である。「火影」を見ただけで「すぐに思ひ出され」るほど鮮明な記憶であることが窺える。だが清逸のアイヌをめぐる思考はそこで中断され、視線は清逸、純次、おせいの象徴であるかのような落葉松へと移り、その内の一本が天狗巢病であるらしいことを視認するのみである。ここで重要なのはそれが誰を指すかではなく、アイヌと共に働いた経験のある清逸が、生業としての漁業を奪われ養殖の労働に従事する／させられるアイヌ、彼らと共に働く純次——井上前掲論文によれば「入植してきた貧しい和人も同じようにサケを捕るのを禁止された」、その面ではアイヌと「同じような被害をうけ」たという——についてなんら言葉を紡ぎ出すことのないその意識である。

清逸が想起したシムキは、アイヌの漁とは異なる方法で捕獲されていくサケを「樺炬火」^{かんぱたいま}を器用に使いこなしながら「見つめてゐ」る。その様子からは「熊」と「樺戸監獄の脱獄囚」とに並列されるような要素を看取することはできないし、清逸がアイヌを「野蛮」なものとしてまなざしているようにも思われぬ。それにも拘らず、清逸は第一四章においてこれらを並列するに至るのである。そのとき清逸の意識において行なわれているのは、共に働いたことがある実際のアイヌの認識に蓋をするという操作であろう。先の引用場面において、「シムキ」という固有名に付随して清逸の意識にのぼっているのは水車の音である。孵化場のシンボルともいえる水車の音は開拓の音、すなわち入植の音そのものである。清逸は「氣を落付けて聞」けば「涼々と鳴りひびく川音の外に」「ことんく」と廻る」水車の音を、開拓／入植の象徴的な音を「かすかに」だとしても聞き取ることが出来る人物である。

同じことは、清逸が猛烈な勢いで論文執筆に取り掛かる前の場面について

でも指摘することができる。物思いに耽っていた清逸が「いきなり激しい咳に襲はれ出した」ところで「孵化場から今帰りがけのところと見え」る純次と遭遇し、長時間背中をさすってもらった場面である。清逸は「血が可なり多量に吐き出され」た紙屑を「突差に」「丸めて水の中に投げようとしたが、思ひかえして自分の下駄の下に踏みにじった」。川下に住む人達」が「河の水をそのまゝ飲料に用ひてゐる」ことを思い出したからである。千歳で育った清逸が「川下に住む人達」を思い浮かべるとき、その中にはアイヌも当然含まれているはずである。

清逸が重い結核を患う人物として設定されていることは、この時期のアイヌが直面させられていた深刻な状況と決して無縁ではない。榎森進『アイヌ民族の歴史』（二〇〇七年三月、草風館）によれば、「和人との接触によつて梅毒や肺結核にかかる者が急増」し「生活に決定的な打撃」を受けていた。「結核死亡者の多いところは、すべて明治二〇年代の後半からドツと和人がおしよせてきた地域であつた」という。いわば清逸は入植和人の息子であるのみならず、その病によつてアイヌを脅かしつつある存在でもあつたのである。そのような清逸の意識にはアイヌの存在が去来してはいるのだが、もう一步踏み込んだ思考が巡らされることはないのである。その一方で、清逸が固執するのは純次のことである。

思ひやりもなく荒々しく引戸を開けて、ぴしやりと締め切ると、錠をおろすらしい音がした。純次は必要もない工夫のやうなことをして得意であるのだが、その錠前も恐らくその工夫の一つなのだらう。こんな空家同然な離れに錠前をかけて寝る彼れの心持が笑止だった。／やがて純次は、清逸の使ひふるしの抽出も何もない机の前に坐つた。

「略」机の片隅には「青年文」「女学雑誌」「文芸倶楽部」等のバツク・ナンバーと、ユニオンの第二読本と博文館の常用日記とが積んであるのを清逸は見ても知つてゐた。「略」／純次は博文館の日記を開いて鉛筆で何か書いてゐるらしかったが、もぞ／＼と十四五字も書いたと思ふ間もなく、ぱたんとそれを伏せて、吐き出す如く、／「かつたいばう」／とほざいて立上つた。「略」ランプを消すや否や、ひどい響を立て、床の中にもぐり込んだ。／純次はすぐに軒になつてゐた。／清逸の耳にはいつまでも単調な川音が聞こえつゞけた。

純次の部屋で寝入ったふりをしてゐる清逸は、純次の振る舞いを冷やかに看取しつつも、その部屋にある文芸雑誌や英語教科書などをひとつひとつ想起している。この意識に、清逸が離れへ向かう途中で聞いた「なんで兄さんにはつか学問をさせるんだ」という純次の父親への訴えが深く関わっていることは疑いない。しかし彼の意識はやはりこれ以上の言葉を紡ぐことはなく、「清逸の耳にはいつまでも単調な川音が聞こえつゞけた」という一文を最後に第六章は閉じられる。「川瀬の音は、清逸の神経を按摩するもの」、つまり厄介な事柄を押し流してくれるものなのであり、作中で執拗に繰り返される「低能」という純次に対する評価もまた、思考放棄のために用いられる都合の良い言葉としてある。

「涼々と鳴りひびく川音の外に」「ことん／＼と廻る」水車の音を聞き取ることができないはずの清逸は、アイヌについてそれ以上思索することはなく、純次の問題についても「低能」という傲慢な評価と「川瀬の音」とよってそれを押し流してしまふ。「熊」と「樺戸監獄の脱獄囚」とに並列されるはずのないアイヌをそこに並列させ、「千歳の山の中」の「野蛮」

さを強化することで自らの論文を「一個の榴弾」として機能させようという発想は、このような思考の放棄によって成立しているのである。

4 「出て行かぬえか」——搾取構造のアナロジー

清逸がアイヌを圧迫する入植和人、純次がアイヌと「同じような被害」を受ける貧しい和人という構図を踏まえたとき、第一四章の末尾で清逸が純次を激昂させ追い出される場面は極めて象徴的である。論文執筆の途中でランプの油が尽きてしまった清逸は「弟の蒲団に手をかけてゆすぶ」り起こす。

「おい純次。お前母屋まで行つて、ランプの油をさして来い」／「ランプを如何する？」／「このランプに石油をさして来るんだ。行つて来い」／清逸は我れ知らず威丈高になつてさう厳命した。／「お前行つて来ればいゝでねえか」／薄ぼんやりと、而かもしぶとい声で純次がかう答へた。清逸は夜気に触れると咳が出るし、石油のありかもよくは知らないから、行つて来てくれと頼むべきだったのだ。然しそんなことをいふのはまどろこしかつた。／「馬鹿、手前は兄のいふことを聞け」／弟は何とも答へなかつた。少しばかりの沈黙が続いた。と思ふと純次はいきなり立ち上つて、清逸の方に近づくが早い、拳を固めて清逸の頭から顔にかけて所きらはず続けさまになぐりつけた。それは思はず清逸をたじろかす程の意外な素早さだった。／「出て行け、これは俺れの部屋だ。出て行かぬばたゝき殺すぞ」／やがて牛の犄ぎ声のやうな口惜し泣きが、立つたまゝの純次の口からめき出された。／清逸は体がしびれるのを覚えて、俯向いたまゝ黙つてゐ

る外はなかった。／「出て行かぬか」／純次は泣きじやくりの中から、かう叫んでいら立ち切つたやうに激しく地だんだを踏んだ。次ぎの瞬間には何をし出すか分らないやうな狂暴さが清逸に迫つて来た。／清逸はしんとした心の中で、孵化場あたりから来るらしい一番鶏の啼き声をかすかに聞いたやうに思つた。部屋の中はしかし真暗闇だつた。

前節最後に引用した場面にあつたように、純次は自身の部屋に鍵をかけている。清逸はそれを「笑止だつた」と一蹴したが、清逸はそのことの意味を取り違えている。純次にとってこの部屋は日々のほとんど全てを覆う労働から解放され、抱き続ける学問への憧れを十分にはなくとも満たすことのできる、いわば最後の砦なのである。一時的に帰省してきた清逸は、寢床としてその一部を借りているに過ぎない。だが清逸は「机の上からつまらぬ雑誌類や下らぬ玩具、みたものを払いのけて」原稿に向つていた。そのあげく部屋の主を、労働で疲労した弟を身勝手な理由から叩き起こしたのである。「居丈高になつて」「厳命」する清逸のその態度は、先住者の権利をはなから無視し、劣等（テクストに依拠すれば「低能」）とみなすことでその侵犯を正当化するセトラ・コロニアリズムの論理と重なるものである。その意味で「出て行け、これは俺れの部屋だ」「出て行かぬか」という純次の台詞は非常に重みをもって迫ってくる。ここで急ぎ付け加えねばならないのは、アイヌと共に働く貧しい和人である純次は、彼らと「同じような被害」を受けていたとしても全く同じ立場では決してないということである。アイヌから見れば純次もまたアイヌを追いやって入植和人の側である。ゆえにこれは代弁ではない。だがこのとき、清逸の

意識に一瞬間入り込んでくるのは「孵化場あたりから来るらしい一番鶏の啼き声」であつた。

そればかりではない。清逸の妹であり純次の姉であるおせい³⁰は、作中で最も救いのない境遇に置かれていた人物である。一七歳のときに女中奉公で小樽に出されたおせいの五年間の生活は「光明も何もない、長い苦しみの一つらなりだつた」。「小学校で少しばかり習ひ覚えた文字すら忘れがちになるのに」、奉公先の娘が「裕かに勉強して、一日々々と物識りになり、美しくなつて行くのを、黙つて見てゐなければならぬ恨めしさ」を抱えながら、「箸の上げおろしにも笑ひさいなまれ」、「晩食後の片付けに小皿一つ粗相をしまいと血眼になつて」働く日々。その中で受け続ける「奥さんの意地悪」、「旦那様の淫らなこと」、一方で「若様といわれるその家の長男」から寄せられた好意は「住み込んだ時から」「惹き寄せられていた彼女を更に苦悩させる。その愛おしさに身を浸して「何もかも忘れよう」と何度も死を見据えたおせいはしかし、その度に「自分の家の貧しさ」を思つて堪え続けてきた。にも拘らず、おせいは父親の非情な裏切りを突き付けられる。父親が持つてきたのは札幌の梶という高利貸との縁談だが、実際には正妻ではなく妾入りとしか考えられない話なのであつた。その本題に入る前、第一七章が次の場面から始まることは看過できない。

「かうした依頼を受けてゐるんです。土地としては立派なもんだし、この通り七十三町歩が一寸切れてゐるだけだから、中々大したもんだが、金高が少し嵩むので、勸業が融通をつけるか如何かと思つてゐるんですがね……尤もこの外にもあの人の財産は偉らしいもので、「略」銀行の方でも信用をしてくれるとは思つてゐるんですが」「略」で、

その金を借り出してどうなさろうといふのかな」「略」「それがこれにならうと云ふんです。これがまた偉いもんですぜ。胆振国長万部字トナップ原野ですな。あすこに百町歩程の賃下げを道庁に願ひ出て、新たに開墾を始めようといふんです。「略」

これは「元孵化場で同僚だつた鞆取りのやうな男」とされる浅田と父親との会話であり、その内容は「胆振国長万部字トナップ原野」の払下げ計画である。「トナップ」とは「アイヌ語で、沼のある川」の意（山田昭夫注釈『日本近代文学大系第三巻 有島武郎集』一九七〇年二月、角川書店）。以下、語の注釈は断りのない限りこれに拠る）であり、既に官有地に編入されてしまつてはいるものの、かろうじて手つかずのアイヌの生活領域であることがこの表記によって明示されている。台詞中にある「勸業」とは一八九七年七月設立の日本勸業銀行のことで、「不動産抵当による年賦貸付・定期貸付および公共団体に対する無抵当貸付を行なつて農工業の改良発達のために政府が直接融資する、日本勸業銀行法にもとづく特殊銀行」である。梶の財産について浅田が執拗に語るのは、不動産抵当による貸付の実現可能性を示そうとしていることによるだろう。「賃下げを道庁に願ひ出て」とあるのは一八八六年六月公布の「北海道土地払下規則」から無償貸付制になり、一八九八年三月公布の「北海道国有未開地処分法」に至つて「資本家階級優先の大土地処分主義の方針が打ち出された」ことを受けたものである。これについて榎森前掲書では、一八八六年北海道庁設置を契機に「開拓政策が従来の小零細農漁民の移住から」「資本の移住」、つまり「本州資本の積極的な導入へと大きな転換」を遂げてアイヌを「貧困のどん底に追いやった」、その梶子になつたのがこの土地処分制

度の整備であつたと説明されている。第一七章冒頭にはこの動向が書き込まれているのである。

このような場面がおせいを視点人物とする章になぜ挿入されているのか。のちの会話で父親が浅田から「六百円程融通して貰つてゐる」こと、それが縁談と称して妾囲いにおせいを渡そうとする真の理由であることが明らかとなるが、山田注釈によれば「ひと月一五円か二〇円あれば、どうにか生活できた時代」である。これだけの大金をかつて孵化場で働いていた浅田が貸せるはずはなく、その出所はおそらく梶である。つまりこの第一七章には資本家階級による土地の取得²¹、その大きな動きの中で弱みに付け込まれる貧しい入植和人の父親、その犠牲となるおせい、その裏面でいよいよ決定的に生活を奪われようというアイヌと、幾重にも連なる搾取構造が描き込まれているのである。おせいが置かれている惨憺たる境遇はこの構造を逆照射すると共に、「どん底」へと突き落とされつつあるアイヌをパラレルに喚起させるものとしてある。

5 「星座等が更らに近くにあるべき必要を見ない」——位置の問題

『星座』にはウォルト・ホイットマン「大道の歌」(“Song of the Open Road”)の一節がエピソードとして付されている。

“I do not want the constellations any nearer ; I know they are very well where they are ; I know they suffice for those who belong to them.”

原詩ではこの前に “The earth—that is sufficient ;” とつう一行がある

が、有島はこれを省略してエピグラフとした。有島武郎訳『ホキットマン詩集』第一輯（一九二一年一月、叢文閣）の「訳者小序」⁽²²⁾には「富田碎花氏の既成の翻訳を座右においた」と記されているため、ここではそれと有島訳とを比較してみたい。

大地——それで充分だ、／私は星宿がこれ以上近くあることを欲しない、／私はそれらはそれらがあるところにゐていいのだといふことを知つてゐる、／私はそれらに属してゐるところの人々を満足せしめることを知つてゐる。

（富田碎花訳『詩集 草の葉』一九一九年五月、大鏡閣）

大地——大地は自足してゐる、／私は星座等が更らに近くにあるべき必要を見ない、／私はそれらが極めて正しい所にあるのを知る、／それらに属するものはそれらに満足してゐるのを知る。

（有島武郎訳「大道の歌」『新潮』一九二一年一月）

一見して特徴的なのは、第三連における「星座」（「星宿」）の位置に対する認識の度合いである。「suffice」のニュアンスを富田が「それらがあるところにゐていい」と訳したのに対し、有島は「それらが極めて正しい所にある」とした。第二連を富田が「欲しない」としたところを有島が「必要を見ない」と訳したことも、そこから遡及的に理解される。

著作集のエピグラフを継続的に考察してきた宮野光男「有島武郎著作集第十四輯『星座』論序説——エピグラフ解釈を中心にして(二)——」（『日本文学研究』一九九五年一月）は一行目が省略されたことについて、続く

以下の三行が「その自足性を獲得」できるのは「大地の自己充足性が、あくまで前提条件」にあるとして、このエピグラフに仮託されたのは「本質において否定性を内包している人間存在のダイナミズムを提示すること」であると読み解き、白官舎の比喻表現「白く塗られたる墓」は「青年群像」が「偽善者集団」であることを示すものであるとした。⁽²³⁾

このように、従来「星座」というタイトルは専ら登場人物たちを象徴するものとして解釈されてきた。その場合、このエピグラフに書き込まれている位置に対する認識は等閑視される。しかし『星座』にアイヌをめぐる問題系が書き込まれているという視座からみれば、このエピグラフで重要なのはまさしく位置の問題であると言わねばならない。「星座」とはすなわち隣接するひとつひとつのコミュニティの象徴である。そのとき「星座」等が更らに近くにあるべき必要を見ない」という一行は、帝国日本の「植民地」化の論理を批判的に暗示する。「極めて正しい所にある」にも拘らず土地を「内国化」し、アイヌを強制的に移住せしめると同時に和人をそこに送り込んで定住させ、さらには「未開」「野蛮」などとみなすことでその略奪行為を正当化した。この論理の暴力性を逆説的に示していたのが、純次に清逸が追い出されたあの場面ではなかったか。その結果「一個の榴弾」となるはずの論文は「かき集め」られた「原稿紙」へと墮し、咳を確実に悪化させる「身を切るような明け方近い空気の中に」清逸は追い出された。その展開には、「植民地」という語を用いながら白官舎に住まう学生たちを「偽善者」と意味づけるテクストの指向性が確かに反映されているのである。

作中には、もう一つアイヌに紐づけられる場面がある。第九章で柿江が出会った「奇妙な物売り」である。この人物が身に付けているのは「鉢巻

の取れた子供の羅紗帽」、「厚衣あつしの恰好をした古ぼけたカキ色の外套」、「兵隊脚絆」であり、手には「日本服を改良しませう。すぐしませう」と「少しも気取らない、而かもかなり上品な書体」で書かれた小旗を持つてゐる。髪は「長く延びたざんぎり頭」で、「支那人のやうな冷静で俐巧な顔付き」であるとも語られる。『星座』というテキストに意図的に配置された異物ともいふべき存在である。²⁴ 本稿の関心に寄せて解釈してみるならば、これらの物や風貌に脈絡を見出すことができないという意味で、調和や同化とは全く無縁の存在として捉えることができる。そのうえで深掘りしたいのは「厚衣」である。

「厚衣」は、「アットウシ」と呼ばれるアイヌの伝統的衣装のことである。榎森前掲書では一八七八年八月、日高地方の平取村コケンの集落を訪れたイザベラ・バード『日本奥地紀行』の一部が紹介されているが、その中に「アイヌ人が丹精をこめて作った衣服を日本人の下層階級が着ているのをいっも見かける」という記述がある(引用は高梨健吉訳、二〇〇〇年二月、平凡社に拠る)。これを踏まえて榎森は「札幌本庁管内のアットウシの生産量」が一八七五年以降「急増」していく様態を具体的な数字で示しつつ、「生産基盤が相次いで破壊される中で、アイヌ民族の多くが生活を維持するために」「伝統的工芸品」を「和人向けの商品として生産」し「販売することによって彼等の生活を支えていたことを示している」とした。本田優子「近代北海道におけるアットウシ産出の様相を解明するための予備的考察——開拓使の統計資料の整理と分析を中心に——」(『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』二〇〇三年三月)もまた、こうした産出と流通の様相を踏まえ、アットウシがアイヌの民族的衣装としてよりも「和人を含む広範な漁業労働者が用いた労働衣として」利用されていた可

能性を指摘している。「奇妙な物売り」が身に着けているそれは、北海道に渦巻く搾取構造のうねりが「植民地の首府」である札幌の市街地まで届いていることを示唆している。

中條百合子や秋田雨雀のようにアイヌを直接的に登場させるという選択を、有島が自らに厳しく制限したことは既に述べたとおりである。それでもなお、同時代において進行していた「植民地」化の様相を、自己批判をも含みながら文学作品として定着させようという試みは、少なからぬ意義を認めるべきではないだろうか。有島の、見方によっては煮え切らない書き方は、自身が搾取する側であることを決して棚上げしないという覚悟である。開拓の暴力性を指摘する際に、その暴力性に加担していることを自覚しつつもそのまま加担の側に身を置き続けるという覚悟である。

北海道の地主の後継者である自らがアイヌを無責任に表象することなく、アイヌを絡め取っていく搾取の様相とその複層性を札幌農学校の学生たちの視点から、その無自覚さも含めて描いたのが『星座』である。そしてテキストは、アイヌを不在化してはいない、ということを繰り返して述べておきたい。「シムキ」という固有名は、その先にいるひとりひとりのアイヌの存在をも指し示すものである。生活の基盤となる地を「アイヌモシリ」と呼び、大自然と共生しながら独自の文化を築いてきた人々の営みは、理不尽な破壊や収奪を受けながらもそれに屈することなく続けられているのである。

しかし清逸は、その手前にいる純次に問題をすり替え、「低能」として切り捨てることでそこから眼をそらした。清逸のみならず、北海道を相対化する眼をもっていたはずであるのに切り捨ててしまった西山、自身の内

に巢食う性欲の葛藤や肯定によってそのとき搾取される女性たちを認識することができない柿江や渡瀬などを通して、その無自覚さは描かれている。⁽²⁵⁾このような観点で人物群を捉えた場合、園のあり方は慎重にみなければならぬが、おぬいに一方的な求婚を迫る場面に限定すれば、この時代になぜ女性が学問を修めるのかということに発想が至らないという意味である。語り手は、おぬいの母が「良人の病が不治だといふことを知ると、毎晩家事が片付いてから農学校の学生に来てもらって、作文、習字、生理学、英語といふやうなものを勉強し始めた」ことを抜き取り語っているから。

札幌農学校の学生たちの視点から「植民地」としての北海道を描いた有島武郎の『星座』は、そのような歴史の責任を問う、確かなアクチュアリテイを具えている。

注

- (1) まず「白官舎」として『新潮』（一九二一年七月）に発表、のち後続が書き下ろされ、改題されて有島武郎著作集第一四輯『星座（第一巻）』（一九二二年五月、叢文閣）として刊行された。「*」で区切られた全一八章から成り、第九章までの内容が「白官舎」にあたる。有島自身は「多分一卷位の厚さものが、あと四冊位にはなるかと思つてゐる」（「書後」有島武郎著作集第一五輯『芸術と生活』一九二二年九月、叢文閣）と続編の構想を示唆していたが、一九二三年六月九日の作家の死によって、それが実現することはなかった。
- (2) その後、西村靖敬「日本における「内的独白」——有島武郎『星座』を中心に——」（『千葉大学人文研究』二〇〇三年三月）によっても、

J・ジョイスやW・フォークナーらに「匹敵する大胆な手法の開発と実践」であったことが論証されている。

- (3) これまでの研究蓄積については、拙稿「有島武郎『星座』研究史——晩年像を再考する視座として」（『有島武郎研究』二〇二二年五月）で整理した。

- (4) 有島武郎研究会第四二回大会（二〇〇七年二月一日、於・横浜市立大学）の講演録。初出は『有島武郎研究』（二〇〇八年三月）、のち『北海道大学文学館年報』（二〇〇九年三月）に再録。その際、典拠資料に関する注が付されたため本稿の引用は後者に拠った。

- (5) 前掲論文でもその内容を知ることができるが、井上はのちに『明治日本の植民地支配——北海道から朝鮮へ』（二〇一三年八月、岩波現代全書）にて詳細をまとめている。

- (6) 『宮本百合子全集』第一八巻（一九八一年五月、新日本出版社）に初めて収録された遺稿。そのためタイトルは仮題である。執筆時期に鑑みて作家名の表記は「中條」で統一した。引用はこの全集に拠った。

- (7) 松本新「風に乗って来るコロポックル」と「北海道旧土人保護法」——中島堅二郎「宮本百合子とアイヌ」批判」（『民主文学』一九九九年二月）。

- (8) その嚆矢となったのは、管見の限りでは石山徳子『「犠牲区域」のアメリカ——核開発と先住民』（二〇二〇年九月、岩波書店）である。アメリカという国家の発展を考えるうえで二〇〇〇年代に注目されるようになったこの概念を、「日本におけるアイヌ民族がたどった歴史」に対しても活用して「検証されるべき」であるとした。その必要性をより詳細に説明したものととして、坂田美奈子「書評リチャード・シド

ル著、マーク・ウインチェスター訳『アイヌ通史——「蝦夷」から先住民族へ』岩波書店、二〇二一年』『アイヌ・先住民研究』二〇二二年三月)がある。

(9) たとえば内藤千珠子「ヒロインとしてのアイヌ——「ゴールデンカムイ」における傷の暴力」(『思想』二〇二二年二月)、岡和田晃「アイヌへの加害の歴史、強制された共生——向井豊昭「御料牧場」を対位的に読む」(『日本近代文学』二〇二三年二月)などがある。

(10) 谷口孝男「二八九九年の有島武郎の方へ——『星座』の街・札幌の光と闇——」(『有島武郎と未完の『星座』』二〇一八年二月、北海道立文学館)。

(11) 「宣言一つ」は、「白官舎」と『星座』との間に発表された。『星座』の随所に書き込まれたアイヌをめぐる問題は、「宣言一つ」の表明、および本作刊行の二ヶ月後に実行された農場解放に至る思想形成と不可分なものとしてある。

(12) 山田伸一「千歳川のサケ漁規制とアイヌ民族」(同著『近代北海道とアイヌ民族——狩猟規制と土地問題』二〇一一年五月、北海道大学出版会)によれば千歳川は「極めて良好なサケの産卵地と評価された」川であり、「北海道内の他の河川と比較するとサケ漁規制の強化が相対的に早く、しかも徹底してなされ」、一八八八年一月に「官営の鮭鱒人工孵化場が道内で最初に」設置された川でもある。孵化場設置の背景には明治初年から段階的に行なわれたサケ漁に対する制約があった。「千歳川の川音だけが涿々と家のすぐ後ろに聞えてゐた」(第六章)とあるように、星野家は千歳川のすぐ近くに位置している。

(13) 井上勝生は前掲論文において、柿江のモデルとされる有島の同期生

蠣崎知二郎が一九〇〇年に「北海道旧土人保護法」を批判する論説を執筆していたことに言及し、この「酷薄なるシヤモ」の「蛇の如き毒手」という表現にみえる有島の認識も柿江と同様のものと述べている。

(14) 掲載紙『読売新聞』の発禁処分により中絶。のち弟子の堀内新泉が書き継いで完結させ、一九〇一年一月に春陽堂より刊行された。

(15) 「放浪」(一九一〇年七月)「断橋」(一九一一年一月・二月)「発展」(同年二月・一九一二年三月)「毒薬を飲む女」(一九一四年六月)「憑き物」(一九一八年五月)。

(16) 一九五一年六月刊行『宮本百合子全集』第一巻(河出書房)に初めて収録された。

(17) 木原直彦『北海道文学史 明治編』(一九七五年四月、北海道新聞社)、川村湊「二つの風の谷を涉って(上・下)」(『風を読む 水に書く——マイノリティー文学論』二〇〇〇年五月、講談社)、内藤千珠子「アイヌを象る文学」(『日本近代文学』二〇〇〇年一月)、神谷忠孝「文学における北方性」(『北海道文教大学論集』二〇〇六年三月)などを参照した。

(18) 内藤千珠子「アイヌ」を象る文学」(前掲)。

(19) 川村湊「二つの風の谷を涉って(上・下)」(前掲)は「泡鳴五部作」などに見られるように、アイヌを愚昧野蛮の劣等人種、未開民族、「旧土人」として表現することが多く、「優勝劣敗の進化論的法則によってやがて衰頹、滅亡の道を歩んでゆくことが余儀ないこととされた」と指摘している。

(20) 清逸のモデルの甥である星野達男は「伯父、星野純逸のこと」(『星

座の会シリーズ(3) 星座』一九八九年七月、星座の会)において、星野純逸に戸籍上の妹「とゐ」がいたものの「幼児に死亡」していると記し、おせいには「有島のフィクション」であろうと指摘している。

- (21) 高山亮二『新訂 有島武郎研究——農場解放の理想と現実』(一九八四年四月、明治書院)に拠れば、有島の父・武は一九七七年に「国有未開地処分法」による農地の賃下げを出願している。したがって第七章はその後継者である有島の痛切な自己批判でもある。

- (22) この「訳者小序」に「原本は David McKay, Philadelphia の "Leaves of grass" 一九〇〇年版を主として採用した」とあるため、原詩の引用はこれに拠った。

- (23) 宮野論と同年に、川上美那子『星座』の内的構造(有島武郎研究会編『有島武郎研究叢書第三集 有島武郎の作品(下)』一九九五年八月、右文書院)も白官舎の比喻表現を考察している。川上よれば、これは「マタイ伝二十三章」に由来する。白官舎は「外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法にて満てる」「白く塗られたる墓」などであり、その中に生きる学生たちは、「偽善なる学者、パリサイ人」にながる者すなわち特権的な知の徒としてあらかじめ語り手によってその将来の可能性を限定づけられている。その「批判的」とするところは「作者自身をも含めた近代日本の知識階層」であると指摘した。本稿は宮野、川上両氏の指摘を踏まえつつ、白官舎に与えられた比喻が示す偽善性を「開拓」との関連において捉えるものである。

- (24) この「奇妙な物売り」は、これまでほとんど考察の対象とされてこなかったが、論者の見立てでは本作に織り込まれた問題系が無造作に凝縮された存在である。見やすいものでいえば、兵隊脚絆と「日本服

を改良しませう」と書かれた小旗は、その動きにくさから袴を「馬鹿馬」と呼ぶ西山と紐づけることができよう。「長く延びたさんぎり頭」は性急な文明開化の暗示であろうか。そうであるならばこれと紐づけられる登場人物は、時計台の中で近代的な時間そのものに打たれた園であろうか(ここでは川上前掲論文における園に関する優れた考察を念頭に置いている)。今後の課題としたい。

- (25) ただし、渡瀬はおぬいとの駆け引きを経て自身の搾取性を自覚する人物である。渡瀬だけが白官舎の住人ではないということもこの文脈で検討する必要があるだろう。なお、柿江と渡瀬が通った薄野遊廓は、厳しい北の大地に開拓者たちを留め置くために、開拓使によって積極的に設置が進められたものである(海保洋子『近代北方史——アイヌ民族と女性と』一九九二年六月、三一書房などを参照)。そこで行われる女性の身体をめぐる搾取は、本稿冒頭で考察した「若い寡婦」の比喻に関わる重大な問題である。「女郎上がり」とされる新井田の奥さんやおせいの搾取のされ方と併せて、更に考究されるべき問題である。

※ 『星座』の本文引用は『有島武郎全集』第五卷(一九八〇年一二月、筑摩書房)、評論および感想は第九卷(一九八一年四月)、書簡は第一三卷(一九八四年六月)に拠る。引用に際してルビは適宜取捨した。傍点は断りのない限り全て論者による。

付記

本稿は、二〇二二年度立教大学に提出した博士論文「有島武郎 晩年像再考」の一部をもとに、大幅に加筆修正したものである。